

昔の幼稚園の思い出

笠井久子

すめらみくにの　くにたみは  
いかなることは　つくすべき  
きみとおやとに　つくすべし

昭和二年の頃です。私は、はかまに下駄のいでたちで、苦爪恵三郎先生の「保育法講義」をたずさえ、十三円の初任給で、この園に赴任してきました。当時の園児たちが、朝会するとき、皇室一家のお写真を前にして、おごそかに歌っていたのがこの歌でした。良家の子弟は人力車で登園、それを門前で、ていねいな挨拶をかわして受け入れます。九時半か十時頃に小使さんが、鐘をたいて歩き回ると、全員を講堂に集めます。コトリともいわせないようにさせると、さきの朝会が始まるのです。

園長先生は師範出の方、御主人は陸軍大佐だったせいでしょうか、皇国民錬成を主軸にした方針で、小学校に近い指導方法がと

られていたようでした。園児は百余名、四クラスで、一年保育三十四、五名に、あとは二年保育の年長、年少と三年保育が若干まじっておりました。

当園の設立が計画されたのは、遠く明治二十六年のことで、女高師出身の某女史によって主唱されたというのですが、機運みのらず、その十数年後に、市婦人協会が、日露戦争戦捷記念事業として開設されたものです。

管理は久留米教育支会に委嘱し、約した条件の中には、一、設備百五十拾円ナイシ参百円、並ビニ経常費一年百五十拾円以内負担スルコト、一、家屋並ビニ運動場ハ市ヨリ無賃ニテ借入タキコト、一、日露戦争ニ関スル貧困ナル戦病死者ノ遺孤、並ビニ廢疾者ノ家族ハ、無月謝ニテ入園セシムルコト、などがあって、当時としては斬新な規約だったようです。

さて、朝会のもとには園長先生の訓示があり、各クラスに入つて、〇〇の時間、という形で保育が始まることになります。保育

費は二円五拾銭でした。

手技の時間には、折紙、はりえ、ぬりえ、写生のほか、モンテッソリー式の貝ならべ、はめこみや、フレーベル恩物の積木や縫取りをし、全て指示通り、お手本通りにしないものは、きびしくいしました。第六恩物の指導はぎつとこんなものでした。

「ハコノフチヲ、スコシ、コチラヘヒイテ、ハコヲウラガエシマス——ハコノフタヲ、シズカニトツテクダサイ——トッタラ、ツクエノムコウガワヘキチントオキマス——サア、ミナサンノダイスキナ、キシヤヲツクリマシヨウ——ハジメニ、ナガシカクヲトツテクダサイ」

「教育者の働きは、一つの助長行為であつて、正しい方向に自発自展せんとするものに援助を与えることである」という言葉も、ここでは素通りしていききました。

律動遊戯は、土川五郎、渡辺先生の講習を受けた中から多く取上げられ、表情遊戯では、水鉄砲、鳩ホッポ、牛若丸、大江山、さらには、荒城の月、殖生の宿など随分高度なものを教えておりました。あとの二つがどうして選ばれていたのか、今でも不思議ですが、おそらくは父兄の要望にこたえてのことだったのでしょう。律動の中には今も残る、かいぐり、おじぎ、エースオブダイヤモンド、ブレッキングなどがありました。打楽器がなかったせいか、子どもたちはよく共同の積木をたたいておりました。時流のムードにのつて、よく歌った歌に次のようなものがあります。

ボクラハ ニホンタンジナリ  
セカイデ ツヨイハ ボクラナリ  
イクセンソウノ グンカンモ  
イクヒヤクマンノ タイグンモ  
スコシモ オソレルコトハナイ  
ボクラノ モツテル テツボウニ  
ヤマトダマシイ タマコメテ  
イチドニ ズドント ウツテヤル ドーン！

この最後のドーン！が一番活気に満ちていました。もう理論と実践のちがいに消沈してはいられません。やれることだけをやるだけやることでした。それで毎年一円ずつ昇給していききました。

談話の時間の中では、童話はいいていが日本昔ばなしで、ときには、同僚と場面を想定して作った掛図式の絵を、めぐりながら話をしたこともありました。父兄の一人でドイツの人が、週に一度、三〇分ばかり英語の単語を教えにみえていました。十四、五分もすると、子どもたちがこっくりこっくりするので、私は先生の後方に立ち、手まね口まねで静止の合図をしていましたことも、こっけいなことでした。

粘土の時間の前日には、往復三時間の道程を山奥までバケツを

手にして、採ってきたものです。戸外の水道の近くに積み上げ、すきなようにさせました。子どもたちが無心に遊んで、ひらひらした服をよごすので、そのよごれを鄭重にとつてやるのがつらくはありましたけれど、筑後川や野の花を摘みにたびたびいき、自然の中に放たれて、子どもも教師も、伸びやかに過したひとときとあわせて、救われた思いがしたのでした。

保育が終ると、一組に四、五人は控室で待っているねえやさんたちに掃除をお願いし、私共は日誌や会計をつけます。日誌は、園長先生が「鉛筆でよい」とおっしゃるのを、いつも毛筆をつかって記録をとりながら、ついでに書の練習もしていました。黒板の面いっぱいをつかって、明日の保育に役立ちそうな絵を毎日のように描きました。この絵を楽しみにして、早く登園するようになった子どももいましたので、一層気をよくして夕暮れをあわてず描いたものです。

同僚と相談した上、園長先生に進言したことがあります。附添いのいる子どもたちが先生の指示通りできないと、すぐさま助けを求めに控室へとんでいくので、附添いの入室をことわることでした。そのかわり掃除が残りました。ピアノの資金集めに、お遊戯会を劇場でやり、マイクがないので蜚声をはり上げて司会にあたったこともあります。ピアノは市内の小学校には、二校しかない頃で、一枚五十銭の券で大成功をおさめました。それから、律動遊戯の伝達講習などに、コンピでよくでかけました。熊本の

五福幼稚園での研究会で、倉橋先生のお話を伺っていたのもその頃です。

昭和十四、五年でしたか、すでに園からは遠ざかっていたある日、小学校の運動会に出場するという、当園児の遊戯をみにいったことがあります。久留米絃のつつそでに、縞のはかま、白い鉢巻の園児たちが剣舞をして満場の喝采をあげたとき、私は戦時局の進展をまのあたりにみるおもいで、心底から憂いたことでした。が、やがて戦災がすべてを灰になし、恩物やぬりえともいとまを告げてからは、ようやく迷路をでたおもいでした。市からの助成金もこれを機にとだえました。

平和な時代——自由主義に根ざした新しい教育の場が広がってきました。過去が残したコチンとしたつめ込みの世界からは遠のき、子どもたちを理解して、充実した教育ができる時がきてもう二十年になります。

いすのりの遊びをして、最後までこのつた子を胴あげし、喜びを分かちあう子どもたち、卒園期には「〇ちゃん、もうすぐいぢねんせいおめでと〜う」とかいた紙をそえて、手作りの花をクラスの一人一人におくる子どもたちにも育ってはきましたけれど。

なごやかさが全てのもの——教師にも両親にも、全ての人々にいきわたり、みだされぬ子どもたちの世界が、美しい音をたててなるように——その日のために、はげみたいものです。